

銭　　の　　話　　(1)

井　本　英　一

1981年に、ノーベル文学賞を受賞したエリ阿斯・カネッティは、モロッコの古都マラケシュを訪れ、その^{スーク}市場に足を向けた。スークには、盲人の乞食が、8人ときには10人、1列に身を寄せ合いながら立っていた。彼らは、みんな喜捨を受けるための木鉢を差し出していた。人が、これらの鉢の1つに、いくばくかの金銭を投げ入れると、硬貨は手から手へと渡り、みんながそれに触り、最後に、1人が役回りどおりに、それを懷中に納めた。8人の盲人の群れから、ほんの2、3歩のところ、白髪の盲目の乞食が1人立っていた。彼は、口をもぐもぐして、何かを噛んでいるようだった。噛み終わったあと、こんどは、カネッティが乞食の手のひらに20フラン硬貨を1枚置いた。彼は硬貨を口にもってゆき、口に押し込んだ。硬貨が中に入ると、もぐもぐと噛み始めた。硬貨は、あるときは左に、あるときは右にあった。噛み終わると、彼は左手の中に硬貨を吐き出した。夥しい唾がいっしょに流れた。それから彼は、硬貨を左側についている隠しの中へ納めた。1人の男が、この老人はマラブート、つまり、この地方の修道士であり、聖者であることを告げた。ここで、著者カネッティは、金銭ほど汚いものがほかにあろうかと自問している。1週間後、著者はこの乞食に再会した。そこで硬貨を1枚与え、何が起こるか、じっと待った。彼は硬貨をせつせと噛んだが、1人の男が近づき、カネッティに、彼は、もらった硬貨がいくらかを確かめるために口の中に入れるのだといった（『マラケシュの声』岩田行一訳、法政大学出

版局，1968年，21－41頁より）。

盲目の乞食や修道士や聖者が、口の中に硬貨を入れて噛んで、いくらもらったかを確かめるという説明には、納得がゆかないものがある。硬貨には、大きさと重さがあるので、たとえ文字と数字が指先で読みとれなくても、確認できるはずである。19世紀末から20世紀にかけて、欧州の中央アジア探險家が、当時の通貨であった馬蹄銀で支払いをしたとき、それを受け取った土地の人間が、それを噛んで、真贋を確かめたというが、これは、金貨や銀貨を噛んで純度を確認したのと同じ行為である。しかし、硬貨を噛むといっても、金貨や銀貨に限らない。盲目でない物乞いが、最低額の銅貨を恵まれた場合でも、それを噛んでからポケットに納めるので、金銭を口の中で噛む行為には、別の意味があったのではないかと思われる。

英国には古く、るいれきに対して、王の病氣^{キングス・イーヴル}という名が与えられていた。るいれきは、頸部にできるリンパ節結核で（OEDには、スクロフュラは頸や顔にできるとある）、進行すると、ぐりぐりが膿瘍化する。この病氣は、王に接触するとかかるが、いっぽう、王に接触すると治るとも考えられた。そこで、王の病氣という名が生じた。王が病人にさわって病氣を癒すのは、王の前段階である呪術師の行った治療の名残りである。フランス王も、同じくらい昔から、るいれき患者を治療した。呪術師が、患部に手を当てることによって、信仰の力に支えられた患者は、回復することができた。硬貨が、いつの時代から用いられるようになったのか、明らかではないが、王が他の患者のるいれきに当てた硬貨を別の患者がもらい、それを自分の患部に繰り返して当てることによって、回復すると考えられていた。いわば、毒を以て毒を制するホミオパシックの療法ともいえるものであった。王によるるいれき治療も、強烈な毒性をもった王による治療であった。王によるるいれきの治療は、戴冠式、復活祭、聖霊降臨祭（ペンテコステ、復活祭後の第7日曜日）、ミカエル祭（9月29日のミクルマス）など、1年のうち、2、3の神聖な日に限られていた。戴冠式と復活祭は、いずれも再生を象徴している。ペンテコステは、復活祭後、もう1度、四句節を繰り返し、再生を確認する

銭の話 (1)

祭りであった。ミカエル祭は、元日（あるいは冬至）における聖婚の結果としての、神の子の誕生する日であったのが、大天使ミカエルの祝日と考えられるようになった。

チャールズ 1 世（1600－1649）が清教徒革命のために断頭台の露と消えたあと、クロムウェルによる共和制がつづいたが、彼の没後 2 年目の 1660 年 5 月 29 日、チャールズ 1 世の次男チャールズ 2 世（1630－1685）が、亡命先から意気揚々と帰国し、6 月 6 日から、るいれき治療にとりかかった。著述家ジョン・イヴリンは、その『日記』の中に、儀式の模様を次のように書き残している。王は慣習にしたがって、るいれきに初めて手を触れた。王が大広間の玉座につくと、外科医たちが病人を抱えて、玉座のもとに連れてゆく。病人がひざまずくと、王は両手で病人の顔か頬をすぐに撫でた。すると、司祭が、「陛下は病人に御手を触れられ、癒され給うた」という。1 人ひとりの病人にこれが繰り返される。全員に行われたあと、王は、もう 1 人の司祭から、その腕にかけた、白いリボンに通したエンジェル金貨を 1 つひとつ手渡され、1 人ひとりの首にそれをかけてやる。最初の司祭が、「それは汝の世界につかわされた真の光なり」と繰り返す。それから、病人のために祈り、祝福を与える。王は手を洗って儀式は終わる（J・G・フレイザー『呪術と王の発生』第 1 巻、ロンドン、1911 年、369 頁。サー・ジェームズ・ジョージ・フレイザー著・メアリー・ダグラス監修・サビーヌ・マコーマック編集、内田昭一郎・吉岡晶子訳『図説 金枝篇』東京書籍、1994 年、86－87 頁）。チャールズ 2 世のるいれき治療は、かなり儀礼化している。マコーレーの『英国史』には、チャールズ 2 世は、10 万人のるいれき患者の治療に当たったとある。文豪サミュエル・ジョンソン（1709－1784）は、1712 年、母に連れられて王宮に参上し、アン女王（1665－1714）に、自分のるいれきを触ってもらった。彼は、ダイヤモンドずくめの、黒い、長い頭巾をかぶった女王に患部を触られたという、かすかな、しかし厳粛な記憶を語っている（J・ボズウェル著、中野好之訳『サミュエル・ジョンソン伝』I、みすず書房、1981 年、15－16 頁）。しかし、ジョンソン博士のるいれきは、終生癒えるこ

とはなく、彼の気分に影響を与えた。

古くは、多くの患者の患部に触れた王の手が、治療の手であった。極度に穢れた王の手は、次々と王の前にひざまずく患者の患部に触れていった。イヴリンの『日記』に見るチャールズ2世は、自らの手で患部に触わらないし、金貨も、他の患者の患部に触れたものではない。王室の行事として、典礼化して上品になっている。いっぽう、他人の患部に当てた硬貨は、自分の病気を治療する強力な手段であった。硬貨は、人手を渡った穢れと、病毒をつけた穢れをもっていた。穢れの権化である錢を首に垂り下げることにより、るいれきが治療できると考えられたのであろう。マラケシュの盲目の乞食が、手に入れた錢を口に入れて、もぐもぐと噛んだというのは、穢れを呑み込んで自分の健康を維持しようとしたことを物語っている。盲目でない乞食も、最低額の錢を口に入れて噛むが、習慣であるといえればそれまでであるが、自らを穢して聖化しているといえる。これらの行為は、錢の純度を調べるためのものではない。

バビロンには聖婚の風習があった。ヘロドトスの『歴史』（松平千秋訳、岩波文庫）は次のようなことを伝えている。この国の女は、一生に1度は、アプロディテ（イシュタル、後出のミュリッタは同一女神）の神殿の境内に座って、男を待った。女たちは、頭に紐を冠のように巻いて座る。男たちは、大勢の女たちを仕切る通路を辿りながら、女を物色する。男は気に入った女を見つけると、錢を女の膝に投げ、「ミュリッタ（アプロディテ）様の御名にかけて、お相手願いたい」というだけでよかった。錢の額は、いくらでもよかった。錢は神聖なものなので、女はそれを突き返してはならなかった。女は男に従い、決して拒むことはなかった。男と交われば、女は家に帰るが、それ以後は、いくら大金を積んでも、その女を自由にはできなかった（1・199）。この個処には、バビロンの聖婚がいつ行われたのか、記されていないが、古代西アジアの地母神祭が春分に行われたので、春分に行われたと考えられる。バビロンの聖婚は、春分新年の行事で、冬至前後に神の子が誕生する仕組みになっていた。アプロディテ社の祭司は、アプロディテに

銭の話 (1)

扮した、バビロンで選ばれた女性と聖婚した。一般の男女は、これにあやかっただのである。ヘロドトスは、祭司とアプロディテの聖婚については述べることはないが、祭司も同じように、彼女の膝に銭を投げたに違いない。手垢とさびで汚れた銭は、極度の聖性をもっていた。口の中でしゃぶって、その汁を呑み込めば、身体に聖性をつけることになる。女は、男から銭を受けとり、身に帯びることにより、男神に扮した男の聖性の支配下に入り、男に従った。女は銭を受けとって、男の聖性に穢されたと思った（それは売春行為ではなかった）。ヨーロッパの近世の死刑囚が、執行吏が肩に手を置いたとたん、穢れの身となったので、2度と人の世界に帰れないと観念したのに似ている。

『新約聖書』には、次のように伝えられている。イエスの12使徒の1人イスカリオテのユダは、祭司長の所に行って、イエスを売り渡そうとした。祭司長は、ユダに銀30枚を支払った（「マタイ伝」26・14-15）。ユダは、イエスを裏切ったあと後悔し、祭司長に銀30枚を返し、自分は罪のない人の血を売ったといった。しかし、祭司長は銀貨を受けとらず、ユダ自身が始末するように命じた。そこで、ユダはその銀貨を聖所に投げ込んで出てゆき、首をつって死んだ。祭司長らは、この銀貨は血の代償だから、神殿の金庫に入れるわけにゆかないといって、外国人（旅人）の墓にするために、陶工の野原を買った。その野原は、今日まで血の野原と呼ばれている（「マタイ伝」27・1-8）。別の伝承によると、ユダは、不義の報酬で、ある野原を手に入れたが、そこへまっさかさまに落ちて、腹がまん中から裂け、はらわたがみな流れ出てしまった。このことは、エルサレムの全住民に知れわたり、この地所が、彼らのことばで、血の野原という意味のアケルダマと呼ばれるようになった（「使徒行伝」1・18-19）。

ユダがイエスを売った銀30枚は、その時点では、血の代償であると同時に、倫理的に穢れたものであった。ユダは、これらの銀貨を聖所に投げ込んで死んだ。穢れたものは、聖所に返したのであろう。所有者のユダは自殺し、銀貨は死の穢れをもつけ、穢れを増幅させた。穢れのある銀貨は、聖所の内部で、さらに穢れを増幅し、神域に止めておけないほど、猛烈な聖性^{あい}=穢性を

つけたので、それ相応に用いられた。外国人（旅人）は、共同体外の者として、強い穢れをもつとされた。その死体を埋葬する墓地は、共同体に恩恵と危害をもたらすとされたので、外国人墓地のもつ聖性に対抗できる錢を使って、墓地を購入した。土をいじる陶工は、過去数千数万年の間に死んでいった人々が埋葬され、土と化した墓地に関係をもつ者であった。陶工の焼く陶器には、過去世のあらゆる人間の靈魂が含まれる。ユダの銀貨で買った陶工の野原は、陶土を掘り出すので、あちこちに、深い穴があいていた。ユダは、穴の1つに落ち、腹が裂けて死んだ。彼の死の穢れに対して、彼の銀30枚の穢れが、結果的に対抗できた。因みに、アケルダマという語はアラム語で、墓地の意味を有していた。バビロンの神殿で用いられた錢は、聖婚に導いたが、ユダが神殿に投げこんだ銀は、ユダの死を招いた。その銀は、行旅の病死者の墓と化した。いずれの場合も、錢のもつ強烈な穢れの働きである。

^{おうよう}王瑤という人が、宋の大明3年（454）に亡くなった。すると、その家に、はだ脱ぎにふんどしをつけた幽霊が入りびたり、いつも、汚いものを人の食物の中に投げ入れた。幽霊は、東隣の^ゆ庾家でも、王の家と同じようにいたずらをした。庾が幽霊に、土や石を投げられてもこわくないが、お金をぶっつけられたら参るだろう、というところ、幽霊は、早速、新錢を数十もち出して、庾の額に投げようとした。庾は、新錢じゃ、痛くない。烏錢が恐ろしい、といったところ、幽霊は烏錢を投げつけ、それが前後6、7度に及んだ。庾は、100錢あまりを手に入れた（『幽明録・遊仙窟』前野直彬，尾上兼英他訳，平凡社，1965年，157－158頁）。幽霊は、錢を食物の中に入れて、食物を穢そうとした。錢は、新錢よりは、烏錢といって、手垢とさびで黒ずんだものの方がよかった。訳者注によると、新しく鑄造された新錢は、信用度が低く、古くから用いられている貨幣が烏錢と呼ばれて、価値が高かったとある。幽霊は、人に恵みをもたらそうとしたのであった。異界の穢れがついた烏錢は、死者の口の中に入れてやる鏹（ビタ）錢のような穢れをもっていた。文芸化したこの説話では、幽霊のいたずらと、人間の知恵が中心的テーマになっている。近代にいたるまで、ヨーロッパの周縁部では、ケーキやパンの中に、あらか

銭の話 (1)

じめ入れられた銭を噛んだ者が、その年あるいは来年の犠牲になる習俗が残っていた。犠牲の風はすたれても、それに類した役につく運命にあった。ヨーロッパに残る民話には、このテーマにもとづいたものがいくつかある。銭は神の恩物で、それを口にする者は、神の聖性＝穢性を身につけることになった。この行事は、子供の遊戯となって伝えられている。

朝鮮には、寺党^{サダン}という売春婦がいて、某甲^{モガビ}という頭目を中心に、群れをつくって、部落から部落へ、寺から寺へと渡り歩き、曲芸などの興行を兼ねて売春を事とした。その群れには、居士^{ヨサ}と呼ぶ男が、寺党である女と夫婦の関係を結んで加わるのであるが、このような男女が数組ないし10数組集まって1つのグループになるのが普通であった。居士は、移動の中で、女のために、洗濯その他一切の雑務をこなした。居士は、客がない場合には、寺党と同衾したが、客の要求があれば、いつでも妻である寺党を提供した。村はずれの広場などで、寺党たちが興行中に、客が寺党たちの1人を気に入ると、モガビに申し込んで指名する。そして、客が金を口にくわえて、「金だ、金だ」というと、寺党がきて、自分の口でそれを受け取った（林鐘国著・朴海錫、姜徳相訳『ソウル城下に漢江は流れる』平凡社、1987年、233－234頁）。

寺党の伝統には、かつての聖所淫売の名残りを見ることができる。寺党は、李朝時代、ことに賤視された僧を相手に売春したが、本来は、寺の境内で、祭りのときに曲芸をする芸能者であったのであろう。夫である居士のある身が、夫の黙認で、他の男に色を売るというのは、男を近づいてくる神と見た時代があったことを思わせる。夫がヒモにすぎないとか、つつもたせ、美人局といった詐偽・脅迫に類するものではなかった。しかし、妻の寺党が稼いだ金は、居士の懐に入った。居士は、妻の一切の面倒を見てやったので、一見、ヒモのように思えないこともないが、かつて、神に仕える巫女の世話をした、ゴッドファーザーの面影を見ることができる。寺党を買う客は、かつての神ということになるが、相応の金額をはずんだのであろう。バビロンの聖婚では、金額はいくらでもよく、女の膝に投げれば、それで交渉は終わり、女は男に従わなければならなかった。朝鮮では、金銭は、口から口へと授受

された。差別意識の強かった朝鮮では、被差別階級の者たちには、手を使って金銭の授受をしない、ことに売春の際には手を汚さないようにしたと先ず考えられよう。金銭を口を使って授受したのは、別の意味があったとも考えられる。李朝末期には、ある程度、一般にも貨幣（硬貨と紙幣）が流通していたであろう。男は、穢れた貨幣を口中でさらに穢して女に与えたのである。女も、穢性＝聖性を失わないように、そのまま、口で受け取ったのであろう。三国時代には、聖婚あるいは聖所淫売が行われたと考えられるが、貨幣経済が発達していなかったのも、硬貨は中国のものをういたであろう。あるいは、銀の塊りや死者の口中に含ませる玉で代用したであろう。男神を演じる男は、口中で銭や玉をよく噛み、相手の女の口に移したのである。

13, 14世紀には、ヨーロッパの貨幣経済がかなり普及したが、当時つくられたゴシック建築の柱や壁に、奇妙な姿の人間が、尻の穴から金貨を排泄している像が彫られているのが見られる。北ドイツのゴスラーの市場に面したギルドハウス（現在はホテル）にも、同じ像が彫られている。これは、貨幣を不潔なものと見た、当時の知識人の感情を伝えたものという（阿部謹也『中世の窓から』朝日新聞社、1981年、220頁）。著者は、以下に、経済学の観点から、貨幣が穢れたものと見なされるようになった理由を説明する。別の個所で、著者は次のように述べている。中世ヨーロッパでは、キリスト教徒によって、ユダヤ人はいわれのない差別を受ける。ある人は、ユダヤ人が便所の中に、処女マリアの絵を置き、その上にいつも排泄していたという話を伝えている。特定の人間に、糞尿のイメージを与えることは、中世においては、ときに悪魔のイメージと結びつき、ユダヤ人の会堂（シナゴグ）は、悪魔の教会と見られてゆく。この場合、金貨を排泄する石像から明らかなように、ユダヤ人には糞尿と貨幣のイメージが重なってゆく（上掲書、254頁）。中世においては、ユダヤ人は、キリスト教徒によって、しばしば集団的に襲撃され、殺害された。殺害現場は、糞尿にまみれた穢れの世界であった。キリスト教徒は、自分の屈折した心理状態をここに投影し、糞尿と貨幣を重ね合わせたとも考えられる。金銭は、ユダヤ人が財をなす以前から、穢れであっ

銭の話 (1)

たことは、バビロンの例を見ても自明のことである。ユダヤ人を穢れと見なし、その穢れでもって、外部から侵入してくる災いを撃退しようとしたのが、ギルドハウスについた、奇妙な人物の排泄像であると自分は思う。像自体がユダヤ人なのである。

銭は糞と関係づけられ、穢性をもつとされる一方、東プロイセンでは、種子入れ袋の中に、パン、貨幣、塩、^{ういきょう}茴香を入れておくと、種子蒔きがうまくゆくとされていた。パンは成長のシンボル、貨幣は犠牲の供物、塩と茴香は魔除けであった。パンは、クリスマスの祭日のために焼かれたものが用いられた。魔除けとしては、自家製の黒灰色のパンがもっとも有効とされた。貨幣を水で洗い、塩とパンをそえておくと、竜も悪人も手が出せないといわれたし、^{うまや}厩にもパンと塩を吊るして魔除けとした（阿部謹也『中世を旅する人びと』平凡社、1978年、112－115頁）。銭は、豊穰と穢れの両面にわたる力をもつと認識された。パン自体が、豊穰の象徴であるのに、魔除けとして最大の効力も発揮した。塩は、いなる状況においても、腐敗することがないので、魔除けに用いられる。茴香は、その香気による。同じヨーロッパで、銭は一方では糞と重ねられ、他方では、清浄と見なされるパン、塩、茴香と重ねられる。

インドの話。2人の兄弟がいた。兄は金持ちで、弟は貧乏であった。2人とも結婚していた。弟嫁は、朝早くから兄嫁の家に手伝いにゆき、ぬかやふすまをもらっては、それを炊き、つぶれた寝台で寝る生活だった。サカト女神の祭りがやってきた。弟嫁は、屑麦の団子とあかざとひえの団子をこしらえておいた。夜、女神がおいでになった。女神は家に入るなり、ああ、ひもじいといったので、弟嫁は、つくった団子を差し出した。女神は満腹すると、用を足したくなったので、どこで用を足したらいいのか、弟嫁に尋ねた。弟嫁は、家中、牛糞で塗り清めてあるので、どこにしてもよろしいと答えた。女神は、家中いたるところに糞をしたが、それでも足りず、次にどこにしようかと尋ねた。弟嫁は、自分の頭にしてくれるように頼んだ。女神は、弟嫁の頭のとっぺんから爪先まで、糞だらけにして帰っていった。朝、起きて見

ると、家は金貨で埋まっていた。かき集めて、片付けにかかったが、きりがなく、疲れてしまうほどだった。これを知った兄嫁は、翌年のサカトの祭りで、弟嫁と同じようにして女神を遇したが、朝、起きて見ると、周りは糞だらけで、悪臭を放っていた（インドゥプラカーン編『ウラタ・カタール集』古賀勝郎編訳『世界口承文芸研究』第4号、大阪外国語大学口承文芸研究会、1983年、134-135頁）。この話は、金持ちと貧乏人のうち、神様は、貧乏人にお恵みを垂れ給うという筋になっている。神祭りは、牛や人の糞で穢した室内で行われた。

『日本書紀』によると、天照大神が新穀の祭りをしているとき、素戔鳴尊^{すさのおのみこと}は、新宮の席の下に糞をしておいた。大神は、知らないで席に座ると、体が穢れて臭くなったので、天の岩屋に入ってしまった。『古事記』によると、仲哀天皇の遺体を^{あらきのみや}殯宮に移したとき、大祓えの儀式をした。そのとき、生剝^{いきはぎ}・^{さかはぎ}逆剝・^{あぜはなち}畔離・^{みぞうめ}溝埋・^{くそへ}尿戸その他の穢れの行事が行われたが、尿戸というのは、祭場に糞をすることであった。神功皇后は、これらの穢れのあと、宝の国であり、当時の日本人のユートピアであった新羅に遠征し、黄金を手に入れる。九州に帰還して、皇子（応神天皇）を生み、大和に達する。その間、皇子は死んだと主張し、喪船を仕立てて、瀬戸内海を進んだ。

仲哀天皇の亡きあと、神功皇后を介して、応神天皇の誕生があるが、穢れの行事を行っている。さらに、応神天皇は、喪船に乗って大和へ向かっている。この行動は、必ずしも、大和で待ち受けている政敵を騙くためばかりではなかったと思う。神功皇后は、皇子は亡くなったと告げて、死の穢れをつくり、皇子の再生儀礼を行ったのである。新生児が辻に捨てられ、拾われて親のもとに帰るのは、1度、黄泉の国に行き、帰還することを意味した。これと同じように、皇子も、1度、黄泉の国を訪れ、瀬戸内海を航行する間は、冥界めぐりをしていたのである。母の神功皇后も、皇子を生む直前まで、新羅への往還を果たした。これも、皇后の黄泉がえりであるとともに、皇子誕生の必要条件であったと考えられる。再生には、死の穢れを必要とした。『プルターク英雄伝』の伝えるところでは、ギリシアでは、処刑された罪人

銭の話 (1)

の死体は、聖所に投げ込まれた。死体を投げ込むことによって聖所を穢し、その聖性を高めるばかりでなく、再生儀礼の導入部としたのである。ヨーロッパのカトリック教会の内部にある礼拝堂には、それを寄進した王侯貴顕聖者らの遺骸を入れた石棺が安置されている。その中には、ガラスケースに入ったミイラが、そのまま参詣人の目に入るものもある（ガラスのない時代は、ミイラはそのまま、あるいは、タペストリーなどを掛けて人目にさらされた）。キリスト、あるいは、キリストにあやかった人物が、傷口から内臓をむき出しにした蠟人形と思われるものが、ガラスケースに入っている場合もある。聖者のミイラが、人骨を塗り込めた壁に掛けられた部屋もある。キリスト教会堂は、壁と床面を死の穢れで汚染することによって、儀礼の導入部を形成したのであった。不動産、貴金属、金銭が、このあと、教会を維持する名目で寄進された。

日本では、寺がいつごろから死や死体と関係をもつようになったか、つまりからにしないが、穢れと銭の説話がある。昔、奈良の左京に貧乏な女がいた。女は、穗積寺の千手観音にお詣りして、生活のすべを請うた。一年たったころ、女の妹が、革張りの櫃をもってきて、姉にあずけ、足に馬糞を塗りつけ、すぐ帰ってくるからといって出ていった。姉は妹が帰ってこないで、妹の家に出かけて、どうしたのかと尋ねた。妹は、何も覚えがないという。姉は不思議に思って、帰って櫃を開けて見ると、銭が100貫入っていた。姉は、もしや、あの穗積寺の観音様が、妹に化けて銭をもってきて下さったのではないかと思い、お寺に行つて観音を見ると、観音の足に馬糞が塗りつけてあった。姉は感涙にむせび、観音が自分を助けてくれたのだと知った（『今昔物語集』巻第16・第11）。足に馬糞を塗ったり、羽根をつけたりする呪術があつて、それは、馬や鳥のように、速く行ったり帰ったりするためのものである。ここでは、観音が、床にまかれた馬糞の上を歩き、足にそれが付いたことをいったのであるが、呪術的な解釈で用いられている。ロバが真珠や金貨をひる民話があるが、この説話では、馬糞と銭が離されているので、特別な汚穢感はない。

昔、インドの波羅奈国の王が、夜半になると、いつも墓から自分を呼ぶ声を3度聞いた。王は怖れて、胆勇ある者を募った。応募した男が武装して墓場にゆくと、はたして王を呼ぶ声がした。汝は何者だと叱ると、自分は伏蔵（埋蔵された宝の蔵）だと答えた。伏蔵はさらに男にいった。王は臆病者だから仕方がない。明朝7人の眷属を連れて汝の家にゆこう。汝は家を掃除し、糞穢を除き去り、8つの器に飲食を盛って待て。翌朝、ご馳走を用意して待っていると、はたして、8人の修行僧が来た。前もっていわれたとおり、まず、上座の者の頭を打ち、隅へ追い込むと、たちまち、金銭がつまった壺となった。あとの7人も、同じように、金銭のつまった7つの壺になった。これを覗き見していた床屋は、ご馳走を用意し、心当たりの修行僧8人を招き入れた。飲食が終わってから、上座の僧の頭を打つと、こちらはただの人間だから、血を出して席を穢し、隅へ追い入れるのが急であったので、糞をたれた。7人までは、同じように打たれたが、8番目の僧が逃れて、王に告げたので、王は床屋を捕らえ、さらに、はじめの男の家を検すると、金銭がおびただしく出た。王がその金を奪うと、金は毒蛇や火の玉となったので、男に返した（『雑宝蔵経』第8巻、大正蔵経、第4巻、本縁部下。『南方熊楠全集』1、平凡社、521-522頁。アジアの民話12『パンチャタントラ』第5巻、第1話「あわて床屋」田中於菟弥、上村勝彦訳、大日本絵画、1980年。インドの古典民話『ひとばでーしゃ』第3篇、第10話「乞食を殺した床屋」平松友嗣訳、理想社、1956年。ナーラーヤナ『ヒトーパデーシャ』第3話、挿話9「他人の真似をして財産を得ようとした床屋の話」金倉圓照、北川秀則訳、岩波文庫、1968年）。

『雑宝蔵経』が伝える話が、金と穢れを良く保っている。男は家を掃除して糞尿の穢れを去り、墓場の伏蔵の精を家に迎え入れる。これは、まず聖所を穢して、神祭りをするのと同じやり方である。金銭は、血や糞尿や死体と共に、存在する。修行僧が化した金は、墓地の伏蔵そのものなので、それを守る蛇になったり、墓地から飛び立つ火の玉になったりする。死体を埋葬した場所は、現実には糞尿と腐敗した汚物で満たされ、猛烈な悪臭を放つ。

銭の話 (1)

人は、その中に、財宝を見たのである。アラビア人の高官や富豪は、自分専用の便所をもっていたので、便所の穴（糞尿は下水管を通して流れ出るのではなく、土の中に吸収される）に金銭を隠した。西暦938年に生まれて、同じ世紀の末に死んだ法官タヌーヒーは、『茶飲み話』の中で、ハーミド・イブヌ・ル・アッバースが、失脚して宰相の地位を追われたとき、問い詰められて、自宅の便所の穴に、黄金40万ディーナールを隠してあることを自白したと伝えている（高井清仁「カイローナイルの水の帰る道」大野盛雄，小島麗逸編著『アジア廁考』勁草書房，1994年，218－219頁）。銀貨や銅貨は、糞尿にまみれると、表面がちまちま変色するので、もっぱら黄金を穴に入れたと考えられる。いずれにしても、銭は糞尿にまみれて保存されたのである。これらの金貨は、死体に副葬された金銭や宝石その他のものが、腐肉や糞尿にまみれて穢されるのと同様に、穢されて聖性をもつのである。

イランのササン朝の開祖アルダシールは、パルティア朝の最後の皇帝アルダワーンの妹を妻としていた。兄のアルダワーンは、妹に毒薬を送り、夫アルダシールを毒殺するよう命じた。ことが露頭し、妻は死刑に処せられることになるが、彼女は腹に七か月の子を宿していた。国教ゾロアスター教の大主教は、彼女を自分の家にかくまう。やがて立派な男児が生まれた。男児をシャープールと名づけて、七歳になるまで養育した。あるとき、大主教は、アルダシールに妻と王子が生存していることを告げた。アルダシールは、大主教の口を、紅玉，真珠，宝石で満たすよう命じた（伊藤義教『古代ペルシア』岩波書店，1971年，287－293頁）。ここでは、アルダシール王は、大主教の口に、銭を入れていないが、王や貴族は、臣下の者に褒美として、口を貴金属，宝石，玉，銭で満たしてやるのが、古代イランを始めとする西南アジアの習慣であった。褒美を与えるのはよいのであるが、いちびって口の中に金貨その他を詰めてゆくうち、本気になって、相手を窒息死させてしまう。アルダシール王は、大主教を窒息死させなかったようであるが、イランには、この手の賞め殺しが行われた（中務哲郎「カンビュセス・エピソードについて－ヘロドトス3・36」『西洋古典学研究』23号，1975年，18－29頁は、賞

めて殺す多くの例を挙げて論じている)。

12世紀初頭のペルシアの詩人ニザーミーは、アフガニスタンにあったグル朝に仕えたが、その王と王子が、セルジューク朝のマリク・シャーと戦って敗れ、捕虜となった。王子は、5万ディーナールの身代金と交換に釈放されることになっていた。ニザーミーは、身代金が到着する日時を予言し、それがぴったり合ったので、王子によって、口に2度も金貨を詰めてもらった。さらに、彼が裾を広げると金貨をいっぱい賜わった(ニザーミー『四つの講話』第3講話、第10話、黒柳恒雄訳『ペルシア逸話集』平凡社、1969年所収)。『王書(シャーナーメ)』によると、英雄ロスタムが誕生したという吉報をもたらした使者には、褒美として、頭に達するまで銀貨がまかれた(フィルドゥスィー『王書』黒柳恒男訳、平凡社、1969年、61-62頁)。トルコマンに捕われの身となっていた詩人が、無事テヘランの自宅に帰還し、王宮に伺候したとき、王を讃える詩を朗詠したので、王は気に入って、詩人の口に金貨を詰め、恩賜の衣裳を下賜し、地位も財産も全部、元にかえしてやった(J・モーリア『ハジババの冒険』I、岡崎正孝他訳、1984年、100頁)。褒賞としての金を口の中に入れる風習は、イランでは、古代から近代まで続いていたことが分かる。王の恩寵と聖性を口の中に入れるのは、結局は、モロッコの盲目の乞食が、低額の銅貨を口の中でもぐもぐと噛むのと同じことである。

多くの民族の習慣に、死者の口中に金を挿入し、冥土の渡河金にするというのがある。死者の口中は、汚液が充満していて、金は死者の腐肉と糞便の中にあるのと同じ状態にある。このような状態の金が、渡河金として渡し守に支払われるのである。金は聖性がついているので、通過の際に何の支障もなく用いられた。イスラムのような、死者の手を握らせる文化でも、口中に瑪瑙を入れたりするが、手に握らせることはない。金が出現するのは歴史時代になってからであるので、瑪瑙のような玉石類を入れるのが古い方式である。

1978年から1979年にわたって、アフガニスタン北部の、シルクロードの要衝であったシバルガン郊外ティリヤ・テペで発掘された第4号墓に葬られた

銭の話 (1)

王の口中には、パルティア銀貨が入っていた。これは、ギリシアの葬制にしたがったハロン（カロン）への支払いとされている。ハロンはエジプト起源の語で、死んだファラオは舟で空を渡るが、そのときの渡し守の名であるという（B・リトヴィンスキー、A・セドフ『クシャン・バクトリアの信仰と儀礼』151頁）。シュメールやバビロニアでも、死者は、地下の川を渡るという観念があった。死者の身につけたお金は、この川の渡し賃ということになる。同じ被葬者の手には、前1世紀のパルティアの貨幣をまねた現地製の金貨が握られていた。死者の口中に銭を含ませる習俗は、アスターナ古墓など、西域、中国などにも見られるが、小谷仲男「死者の口に貨幣を含ませる習俗」『富山大学人文学部紀要』第13号、1988年は、ヘレニズムからの借用と考えている（V・I・サリアニディ著・加藤九祚訳『シルクロードの黄金遺宝』岩波書店、1988年、263－264頁、訳者解説）。シバルガンでは、死者は口の中ばかりか、手の中にも銭をもっていた。この伝統は、イスラムには伝わらなかったようである。この個所を書く二日前（95・11・7）、電車の中で、偶然に、マヤ神話にも、死者が渡し守に支払う銭を口中に入れるという話を武部智子氏から聞いた。マヤの習俗は、ヘレニズムの伝播とは関係なく、独立したものか、さらに古い時代にアジアから持ち込んだもののいずれかであろう。

フランスでは、死者に、自分がもっているいちばん大切な銭を与え、彼があのだで歓迎されるように願った。渡し守カロンに与えた古代ギリシアのオボロス銀貨の習俗は、現代ギリシアにも残っている。スラヴ人の中では、この金は、死者の旅の費用に当てられた。日本の仏教徒は、三途の川の老婆（脱衣婆）に与えるものと考えている（アルノルド・ヴァン・ジェネップ『通過儀礼』秋山さと子、彌永信美訳、思索社、1977年、167頁）。日本では、死者の口にビタ銭を入れる。ビタ銭は、中世の銭貨鑄造時にできた粗悪な銭で、忌むべき銭とされた。ビタ銭は、その他に、家族の爪などと共に、頭陀袋に納める仕方もある。ビタ銭はドラクマ銀貨の六分の一のオボロス貨や、フランス人が死者に与える最高の銭とは対称的である。日本では、中国の死

者の両手に握らせる握のような、死者の手に錢を握らせる習慣は、なかったかのである。新生児が誕生したとき、誰かの生まれ変わりに違いない証拠として、あのとき握らせて埋葬した錢を手に握って生まれたという類の説話は聞かないからである。

ギリシア・ローマ神話には、次のような話がある。プシケーは、見てはいけないといわれていた、夫クビードーの寝姿を見てしまった。プシケーは、夫の去ったあとを訪ねてゆく。ウェヌス女神にさまざまな試練を課せられるが、最後にウェヌスの手箱をもって、冥界の王を訪ねさせられる。プシケーは、蜜酒でこねた大麦の餅を両手にもち、口の中に銅貨を2つくわえてゆく（2つの銅貨のうち、1つは、往きに渡し守カロンが自らとり、もう一つは、帰りにとる）。プシケーは、冥界でウェヌスの手箱を開けると、その場で失神して、屍のようになる。夫のクビードーは、プシケーのもとに駆けつけ、彼女を目覚めさせ、もとの幸せな状態に戻る（アプレイウス『黄金のろば』上巻、呉茂一訳、岩波文庫、1956年、175-178頁）。この場面は、プシケーの死と再生の秘儀を描いたものであるが、彼女は、ギリシア・ローマの葬儀で供えられる餅を、両手にもち（中国の握と同じように）、口の中に銅貨（オボロス貨ではない）を入れて冥界を訪ねる。渡し守カロンは、自分の手で、彼女の口から錢をとっている。彼女は、冥界に下るまでは、死者ではないが、銅貨は、彼女の口中で聖化されていた。韓国の芸能者は、観客の心付けを、客の口から自分の口に移して受け取るという記録があるが、カロンの場合も、彼は死者の口から、自分の口で受けとるのが、古い仕方ではなかったと思われる。

古代エジプトのメンフィスの主神オシリスは、冥界の王で、聖牛アピスは、オシリスの化身と考えられていた。永い間隔をおいてしかアピスは出現しないが、アピスが出現すると、エジプトの全国民は、一張羅の衣裳をつけ、歓喜して祝宴を開いた。聖牛アピスは、天上から光が降りて母牛の胎内に入り、生まれた牛で、母牛は、1度出産したあとは、2度と受胎することがなかった。アピスの特徴は、黒牛であるが、眉間に四角の白い斑点があり、背には、

銭の話 (1)

鷲の形をした模様が浮き出て、尾は白黒二色になっており、舌の裏には、甲虫のような形をしたものがついていて（ヘロドトス、2・38、3・28）。オシリスには、聖牛アピスが犠牲として供えられた。冥界の王オシリスは、ある周期で、その力を失ったので、力のある他我を殺して、その血を浴びることによって再生した。オシリスの他我である聖牛アピスは、供犠されて自らを殺すことにより、死せる王オシリスを再生させるばかりでなく、エジプト全国民を再生させたのであった。アピスは、エジプト国民を救済するために、国民の代表として殺されていった。金銭が存在しなかった時代には、口中に玉石を入れたと考えられるが、さらにそれ以前は、地中から出てくる虫を入れたのではないかとと思われる。アピス牛の口中には、銭を入れる習慣はなかった。舌の裏に、甲虫のような肉の塊りが付いていた。これが、あの世への通行証になった。渡し守カロソへの運賃という思想は、アピス牛信仰の中にはまだ見られない。アピスの口中から、アピスの死後、甲虫の幼虫が変態をとげて、成虫化するのにあやかって、アピス＝オシリスも再生して欲しいと人々は願ったのであろう。

中国の殷代の墓からは、口中から貝がしばしば出土する。時に佩玉が出土することもある。殷に次ぐ西周時代から、遺体の口から蟬形の玉が現れるようになる。殷代にも軟玉の蟬形があるが、口中に入れた含蟬^{がんぜい}とは認められないということである。漢代墓からは、もっぱら遺体の口や頭部から、蟬形玉が出土する。含蟬には、この時代になると、ガラス製と玉製があるようである。中国では、死者の顔を覆う布に玉を鏤めた玉面覆や、遺体全体を覆う玉衣が発達した。玉が用いられたのは、玉がもつ力によって、遺体の腐敗を防ごうとするためであった。中国では、古くから玉を粉末にして服用すると、仙人になれるという道教の信仰があった。死体の口中に玉を入れるのは、この神仙思想の影響があったのであろう（巽善信「葬玉における含蟬の意味」『西谷真治先生古稀記念論文集（古墳文化とその伝統）』西谷真治先生の古稀をお祝いする会、1995年、719－739頁）。中国では、口中に銭を入れる前段階として、殷代ですでに子安貝を用いていた。子安貝は、口中の汚物の中に

挿入された。玉類は、口中の汚物を浄化すると信じられたのであろうか。玉も、口中で聖化されたと考える方がよいと思われる。白玉のほか、中国でも紅い瑪瑙が用いられている。前述したように、イスラム教徒は、死者の口中に瑪瑙を含ませる。イランのシーア派は、長さ2.5センチ、幅、1.5センチ、厚さ3ミリの不整楕円形の瑪瑙に、シーア派の五人の聖人であるマホメット、アリ、ファーテメ、ハサン、ホセインの名を刻んだものを使う。骨董屋にゆくと、この種の瑪瑙が無造作に皿の中に入れてある。死者を出した家では、これを求めて帰り、死者の口中に入れると説明を受けた。新品には聖性がないが、墓から出土したものには、聖性が付着しているのであろう。日本では、ある時期から、ビタ錢が使われるようになったが、似たような考え方があったのかも知れない。エジプトのアピスの舌の裏についた甲虫状の肉塊と、中国の含蟬の間には、関係がある。イスラム教徒の瑪瑙は、虫の形をとっていないが、エジプトの場合と同じように、糞や汚物の中から再生するスカラベに類するものであったかも知れない。貨幣が流通するようになると、錢にとって代わられたが、錢も虫と同じように、あの世とこの世の間を往来できるという考えが、共通してあった。

中国では含蟬のほかに、死者の口に一文錢を含ませる習慣があった。死体に魔が侵入するのを防ぐのが目的であるとされる。死者の口中にあった一文錢をとり出して、それを紐に通して子供の首に掛けたり、身体に付けておくと、魔除けとして有効であった。その他、土地の神を祭る城隍廟の春秋の祭りで、神輿を担ぐ行列がある。行列の先頭には、白装束をした白無常と呼ばれる、城隍神の侍者が進む。白無常は白老爺パイラオイェとも呼ばれ、紐に通した一文錢を口にくわえている。彼は、一丈もある巨大な人形の中に入り、腹のあたりから顔をのぞかせる。白無常の相手は黒無常で、こちらは、小型の人形の中に入り、帽子のあたりから顔をのぞかせる。白老爺の錢は、人々の非常に欲しがるものであり、これを得た者は、子供の首飾りにしてやると、魔除けとして効があるばかりか、その子は、将来、富貴を得ると信じられている（永尾龍造『支那の民俗』磯部甲陽堂、1927年、225－226頁）。神のお旅は、神

銭の話 (1)

の再生のための移動で、それは、神の冥界帰りを意味する。先頭の白老翁が口にする銭は、死者の口中の銭と同じもので、先導役の白老翁が口にするので、それは、冥土への渡し守が手にとる銭でもあった。聖性を得た銭は、富貴を手に入れる力をもつ。イスラム教徒は、墓地から出土した、死者の口中にあった瑪瑙を、再び新亡の口に入れる。それは魔除けのためであるが、死者のあの世での再生と、富貴を願うものでもあった。

ビルマ（ミャンマー）国民の75パーセントを占めるビルマ族の習慣では、死者の口に渡し守に与える銭を入れる。アラカン州に住むアラカン族の場合も、遺体の口には、冥界への渡し賃として、金や銀、あるいは銭を入れ、棺の上に彩色米を置く。東と北で中国に、西でインドに接するカチン州の主要民族であるカチン族の間では、死者の口の中あるいは腋の下に、この世とあの世の境界にある川の渡し賃として、銀貨を挿し込む（大野徹「ビルマ諸民族の葬儀と死観」『世界口承文芸研究』第3号、1982年、91、94、97頁）。仏教徒であるビルマの諸民族の間でも、同じような習慣があることがわかる。ビルマでは、棺の上に米を置く。日本では、棺に入った死体の上に米を撒く。中国では、含蟬は、死者のあの世での食料の費用という意味をもった。穀物は、脱穀したものでも、死者の食糧としてだけではなく、発芽して再生する連想もさせたであろう。韓国の葬儀では、柳材のスプーンで米をすくって、死者の口に入れてやる。米は三度入れるが、入れるたびに、「千石だあ」「五千石だあ」「万石だあ」と声をかけてやる。米の他に、銅貨を口に入れてやることもあるが、米や銅貨を入れることを飯合^{バンハブ}という（安宇植編訳『続・アリラン峠の旅人たち』平凡社、1988年、58頁）。ここでは、口中の米は豊穰のシンボルである。聖性を得た米や銭が、豊穰のシンボルであるのは、容易に理解できる。銭は、渡し守に与えるというよりは、ここでは、穢れの中から増殖する財宝としてとらえられている。日本その他の国の文化で見られる死者の枕飯は、同じように、死出の旅路の食糧とも考えられるが、死の穢れの中の豊穰のシンボルとも考えられるのである。新生児の枕飯も、死者の枕飯と同じ形式のものであるが、これも豊穰のシンボルと考えるべきもので、

新生児の長い人生行路の食糧のシンボルといったものではなからう。

14世紀のモロッコ生まれの大旅行家イブン・バットゥータは、『三大陸周遊記』（前嶋信次訳，角川文庫，1961年）の中で，メッカ巡礼者が眠っていると，人々がその口に錢を入れると述べている。彼はいう。イラクやイランのホラサンからメッカにやってきた巡礼たちは，エジプトやシリアの巡礼団が巡礼を終えて出発したあとも，なお四日間メッカに残り，カアバ神殿を離れぬ人々に多くの喜捨をする。そのあたりを夜間まわり，行き会う外来者やメッカの人々に，錢や布を与え，眠っている者の口に，金貨や銀貨を入れてゆく。あまり多量に振りまくものだから，メッカの金の相場が下落したほどである（68頁）。この行為は，メッカ巡礼を達成した者への報賞として，金貨や銀貨を口に入れてやったと考えることができるが，眠っている者は，魂が身体から遊離しているので，一種の死の状態にある。これらの錢は，報賞としての路銀ではなく，死者の口の中に入れる錢と変わらないのである。金関丈夫は，海南島で部族民の葬式に立ち会った際の記録を残している。それによると，死体をアンペラに巻いて納棺する直前，近親者が，頭の方のアンペラを開いて，何枚かの銅貨を入れたという（『考古と古代』法政大学出版局，1982年，159頁）。この場合は，死者の口の中に入れるのではなく，顔の上に置くのであろう。渡河錢としての一枚の錢でないことに注目しなければならない。これらの銅貨は，穢れの中の豊穰を表わすものであろう。

口の中に錢を入れるのは，昔の人が財布をもたず，錢を口の中に入れる習慣があったからだという説がある（渡辺照宏『死後の世界』岩波新書，1959年，70頁）。この説は，ドイツ人の説で，興味深い説であるが，錢以外のものの場合は，どう説明するのであろうか。死者の口の中に入れる錢は，生前の死者の財産の一部を持たせてやるのだというドイツ人の説も面白い（前掲書，72頁）。甲虫や蟬はいったい何なのか，この説では説明できない。これらの説は，錢が汚物に満ちた死者の口の中に入れられることを度外視している。

（つづく）